

令和6年度 ふくしま学力調査 報告書【概要版】

令和6年10月31日
福島県教育委員会

1 ふくしま学力調査について



1 調査の目的

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

2 調査実施日

令和6年4月24日（水）～5月10日（金）

※ 各学校において期間の中から1日を選択し、全学年同日に実施。

3 参加学校数・参加人数

(1) 小学校 385校

※ 義務教育学校前期課程及び県立特別支援学校小学部を含む。以下同じ。

(2) 中学校 211校

※ 義務教育学校後期課程及び県立特別支援学校中学部を含む。以下同じ。

(3) 児童生徒数（人）（質問紙を含むいずれかの教科を1つ以上実施した児童生徒の人数）

小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
13,660	13,898	12,953	13,167	13,077

4 調査事項

(1) 教科に関する調査

① 小学校第4学年～第6学年 国語、算数

② 中学校第1学年・第2学年 国語、数学

(2) 質問紙調査

○ 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項

5 結果の活用について

(1) 児童生徒の学習改善に活用する

各学校は、個人結果票をもとに児童生徒に学習改善に向けたアドバイスを行う。また、個人結果票を保護者と連携するための資料とし、家庭学習の充実につなげていく。

(2) 各学校の授業改善に活用する

各学校は、返却された結果から児童生徒の「学力のレベル」や「学力の伸び」の状況を分析し、学力を伸ばした可能性の高い取組を校内で共有するなど学力向上のプラン等を見直し、今後の授業改善につなげていく。

6 「学力のレベル」と「学力の伸び」について

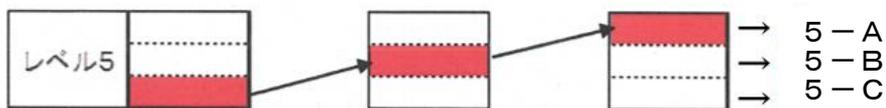
各学年ごとのレベルの範囲 (白が当該学年のレベルの範囲です)

レベル	各学年ごとのレベルの範囲						レベル	レベル(3分割)	数値
	小4	小5	小6	中1	中2	中3			
レベル12							レベル12	12-A	36
								12-B	35
								12-C	34
レベル11							レベル11	11-A	33
								11-B	32
								11-C	31
レベル10							レベル10	10-A	30
								10-B	29
								10-C	28
レベル9							レベル9	9-A	27
								9-B	26
								9-C	25
レベル8							レベル8	8-A	24
								8-B	23
								8-C	22
レベル7							レベル7	7-A	21
								7-B	20
								7-C	19
レベル6							レベル6	6-A	18
								6-B	17
								6-C	16
レベル5							レベル5	5-A	15
								5-B	14
								5-C	13
レベル4							レベル4	4-A	12
								4-B	11
								4-C	10
レベル3							レベル3	3-A	9
								3-B	8
								3-C	7
レベル2							レベル2	2-A	6
								2-B	5
								2-C	4
レベル1							レベル1	1-A	3
								1-B	2
								1-C	1

(1) 学力のレベル

全ての問題に難易度を設定し、「どのくらい難しい問題を解く力があるか」を「学力のレベル」で表す。「学力のレベル」はレベル1からレベル12までであるが、測定は各学年7つのレベルで行う。なお、福島県で中学3年生は実施しないため、「学力のレベル」はレベル11までである。

さらに、1つの「学力のレベル」は3分割され、「学力の伸び」が詳細に分かる。例えば、同じレベル5でも、「学力のレベル」が高くなるとバーの位置が上がる。



(2) 学力の伸び

集計対象となる児童生徒の「学力のレベル(3分割)」を数値化し、前回調査との差を計算する(例: 1-Cは“1”、11-Aは“33”)。

(3) 「学力が伸びた児童生徒」の定義

「学力のレベル(3分割)」を数値化した数値が、前年度から1以上増加した児童生徒を「学力が伸びた児童生徒」と捉える。

2 調査結果から見える県全体としての傾向

1 教科に関する調査の結果から

【国語】

- (1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P8)
- 全ての学年において、令和5年度調査から数値が1～2上がっており、着実に学力が伸びている。
 - どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。
- (2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P9～10)
- 年度の異なる同じ学年集団の比較から、小学5年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和5年度調査から1つ下がり、他の学年は同じである。
 - 同じ学年集団の経年比較から、中学校1年生は、「学力のレベル」の平均の位置が、令和5年度調査から1つ上がり、他の学年は同じである。
 - 同じ学年集団の経年比較から、全ての学年において、上位レベルに属する児童生徒の割合が少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合が多くなる傾向がある。
- (3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P13～14)
- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、令和5年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
 - 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。

全ての学年において、年々着実に学力が伸びている。また、どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。

一方、学年が上がるにつれて数値の伸び幅が小さくなっていることや、中位層の生徒の「学力の伸び」が少ないことから、国語科の学習を通して「何ができるようになるか」が児童生徒にとって不明確であり、主体的な学びが実現できていない可能性がある。改めて学習指導要領改訂の趣旨や各領域の指導事項の意図するところを確認し、「何ができるようになるか」を児童生徒と共有することが大切である。併せて、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を具体的に示し、児童生徒が見通しをもって主体的に学ぶことができるようにすることも求められる。

【算数・数学】

(1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P8)

- 全ての学年において、令和5年度調査から数値が1～2上がっており、着実に学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。

(2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P11～12)

- 年度の異なる同じ学年集団の比較から、小学校5年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和5年度調査から1つ下がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、中学校1年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和5年度調査から1つ上がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、全ての学年において、上位レベルに属する児童生徒の割合が少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合が多くなる傾向がある。

(3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P15～16)

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、令和5年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。

学年によって伸び幅に違いはあるものの、全ての学年において、年々学力が伸びている。また、どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。

一方、学年が上がるにつれて、中央のレベルより下位の児童生徒の割合が多くなっていく。このことから、早い段階でつまづきを解消できるよう、児童生徒一人一人がどのようなつまづきをしているのかを分析し、具体的な支援を行うなど、個別最適化された学びを実現することが求められる。

2 児童生徒質問紙調査と学力の関係から (P17～19)

【「学力のレベル」の高さと関係が見られた回答】

(1) 授業に関すること

- 授業で学習の見通しを持つことや、話し合い活動で自分の考えを持つこと、学習内容のつながりを明確にすることがあったとする回答。

(2) 学習意欲や学習環境に関すること

- 学習の準備を整え、授業に臨むことができているとする回答。
- 教師及び他の児童生徒から認められたことがよくあるとする回答。
- 教師の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表することができるという回答。

(3) 家庭での生活に関すること

- 中学生において、土曜日や日曜日など学校が休みの日に勉強する時間が長いとする回答。
- 読書の冊数が多いとする回答。
- 家庭にある本の冊数が多いとする回答。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、学習意欲や自己肯定感の醸成などにつながる学級経営、家庭学習の充実等は学力向上に与える影響がある。引き続き、「ふくしまの『授業スタンダード』」を活用した授業改善、一人一人の児童生徒を大切にされた学級経営、「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」を基にした自己マネジメント能力の育成を通して、児童生徒の資質・能力の育成を図っていくことが重要である。

上記の結果は、県全体としての傾向であり、そのまま各自治体や各学校・各学級においても同じであるとは限らない。県全体としての傾向を参考にしつつ、各自治体や各学校に送付されている結果帳票を活用し、詳細に分析することが重要である。その分析結果から実態を捉え、授業の質の向上や望ましい学級集団づくり等に生かしていくことで、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばしていくことが期待できる。

3 学校質問調査結果から見える学校の取組状況 (P20～21)

(1) 学校・教職員の学力向上に向けた取組状況

- 小中学校とも、3年間で肯定的回答が増加している。
- 各学校において、校長のリーダーシップの下、組織的対応がなされている。
- 小中学校で肯定的回答に大きな差がある質問項目があり、小中で取組がつながっていない校区がある可能性がある。

(2) 令和6年度の小学校6年生、中学校3年生に対する取組状況

【家庭学習の状況について】

- 家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。
- 家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。
- 家庭学習や学習規律に対する意識が年々高まっていくような取組が求められる。
- 家庭学習の与え方について、小中で差が見られる。

【国語の状況について】

- 補足的・発展的な学習を行う時間が年々増加していた。
- 発問や対話を重視した授業が年々増加していた。
- 発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導を充実させていくことが求められる。

【算数・数学の状況について】

- 継続して、児童生徒に自ら解決の方法を考えさせる発問がなされていた。
- 現小学校6年生に対しては、授業のまとめの場面で、学習した内容をどのように活用できるかを児童に文章で書かせたり、図やグラフで書かせたりする授業の割合が年々増加していた。
- 現中学校3年生に対しては、中学校1年生時よりも中学校2年生時の取組の方が肯定的回答が減少している項目が複数見られた。

(3) 調査結果の活用状況

- ほぼすべての学校が、個人結果票を返却する機会を捉え、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。
- ほぼすべての学校が、返却された結果帳票を用いてデータを分析し、指導にいかしている。
- 学力や非認知能力等を大きく伸ばした教員へ聞き取りを行った学校が年々増加している。
- 調査結果から把握した内容について全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が年々増加している。

3 教科に関する調査の結果

(1) 県全体の平均正答率(%)と「学力のレベル」

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
国語	63.8	61.9	57.0	60.5	61.8
	6-C(16)	6-A(18)	7-B(20)	8-C(22)	8-B(23)
算数 数学	61.8	58.6	56.2	56.2	55.6
	5-C(13)	5-A(15)	6-B(17)	7-C(19)	7-A(21)

上段：平均正答率(%) 下段：平均の学力のレベル(数値)

(2) 県全体のカテゴリー別平均正答率(%)

【国語】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		問題形式別平均正答率		
	言葉の使い方	我が国の文化	情報の扱い方	読むこと	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式	記述式
小学校4年	78.1	48.9	40.6	54.0	72.9	46.6	67.3	62.6	41.8
小学校5年	70.3	59.7	46.7	58.6	67.2	54.9	64.0	61.6	31.3
小学校6年	57.1	36.6	58.9	60.6	54.7	60.1	54.5	64.0	36.8
中学校1年	59.6	44.7	62.5	63.1	58.7	62.9	63.5	56.5	43.8
中学校2年	60.7	77.2	59.0	55.9	65.5	56.9	65.0	56.6	53.3

【算数・数学】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		平均正答率 問題形式別		
	数と計算	図形	測定(小4)変化と関係(小5)中1	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式	記述式
小学校4年	63.6	49.8	76.7	38.5	65.8	52.5	62.8	62.5	37.1
小学校5年	55.3	59.7	61.9	74.4	61.6	51.9	60.5	59.5	15.5
小学校6年	57.1	51.5	63.6	56.1	55.8	57.4	58.6	53.4	58.6
中学校1年	65.4	52.0	48.2	50.6	59.1	36.1	54.8	59.3	32.0
	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		平均正答率 問題形式別		
	数と式	図形	関数	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式	記述式
中学校2年	55.6	54.3	58.9	52.7	57.7	48.1	61.5	50.6	35.7

(3) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化

○ 国語

学年	小4	小5	小6	中1	中2
現中2	R2 中止	R3 18	R4 20	R5 22	R6 23
現中1	R3 18	R4 18	R5 21	R6 22	
現小6	R4 15	R5 19	R6 20		
現小5	R5 16	R6 18			
現小4	R6 16				

○ 算数・数学

学年	小4	小5	小6	中1	中2
現中2	R2 中止	R3 16	R4 19	R5 19	R6 21
現中1	R3 14	R4 16	R5 17	R6 19	
現小6	R4 14	R5 16	R6 17		
現小5	R5 13	R6 15			
現小4	R6 13				

※ 表の中の数値は、児童生徒の「学力のレベル（3分割）」を数値化したものである。

※ 横に見ると「同じ学年集団」を、縦に見ると「年度の異なる同じ学年」を比較することができる。

○ 令和5年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合（％）（県全体）

	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
国語	73.8	61.6	70.6	61.3
算数・数学	64.1	67.5	69.3	71.1

※ 小学校4年生の学力の伸びが見られるのは、令和7年度調査実施後となる。

【国語】

（同じ学年集団の経年比較）

- 全ての学年において、令和5年度調査から数値が1～2上がっており、着実に学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。

（年度の異なる同じ学年の比較）

- 小学校4年生、中学校1・2年生は前年度と同じ数値である。
- 小学校5・6年生は前年度より数値が1低くなっている。

【算数・数学】

（同じ学年集団の経年比較）

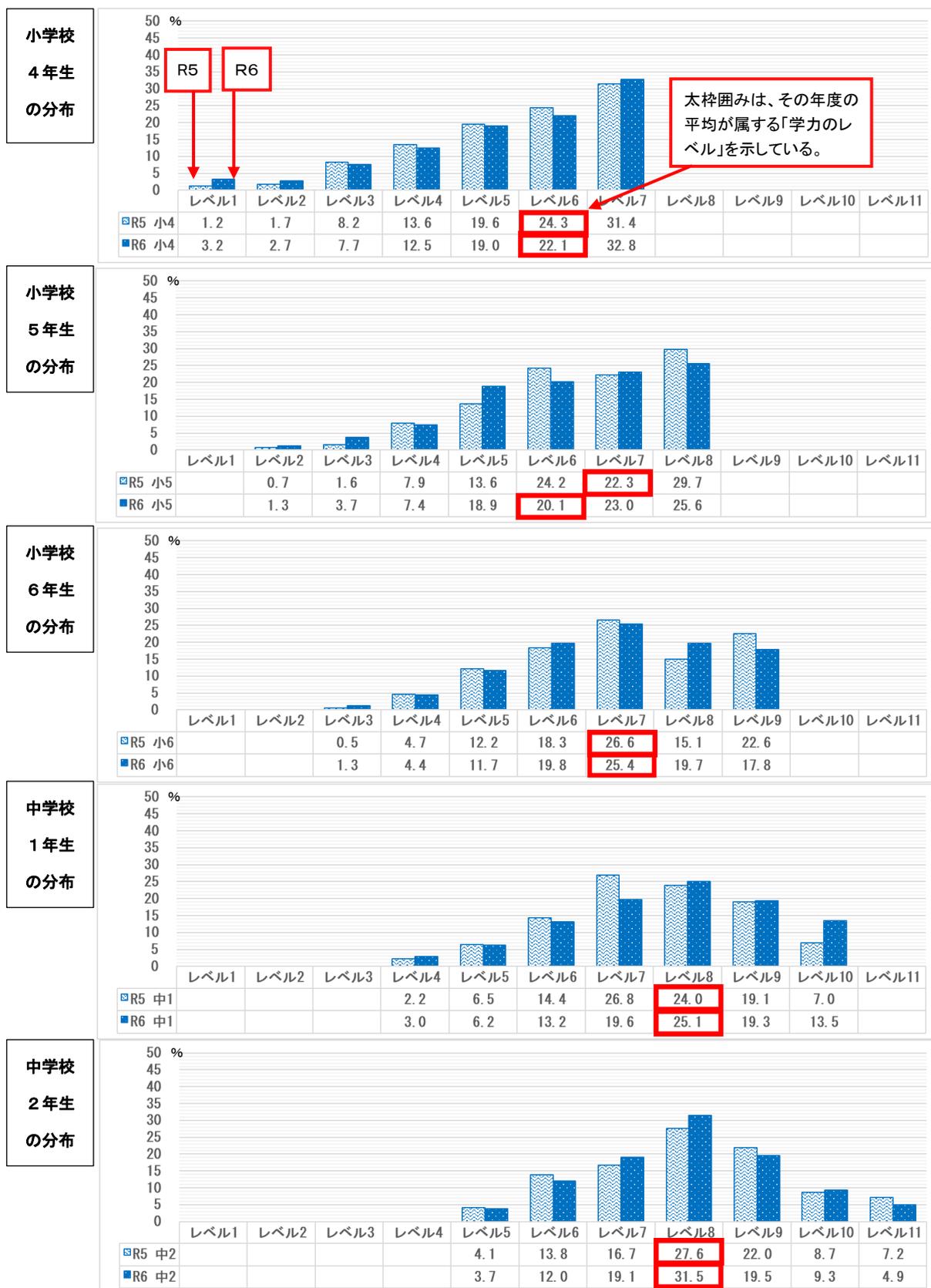
- 全ての学年において、令和5年度調査から数値が1～2上がっており、着実に学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和5年度調査から学力を伸ばしている。

（年度の異なる同じ学年の比較）

- 小学校5年生以外は、前年度と同じ数値である。
- 小学校5年生は前年度より数値が1低くなっている。

(4) 県全体の「学力のレベル」の分布 ① 国語

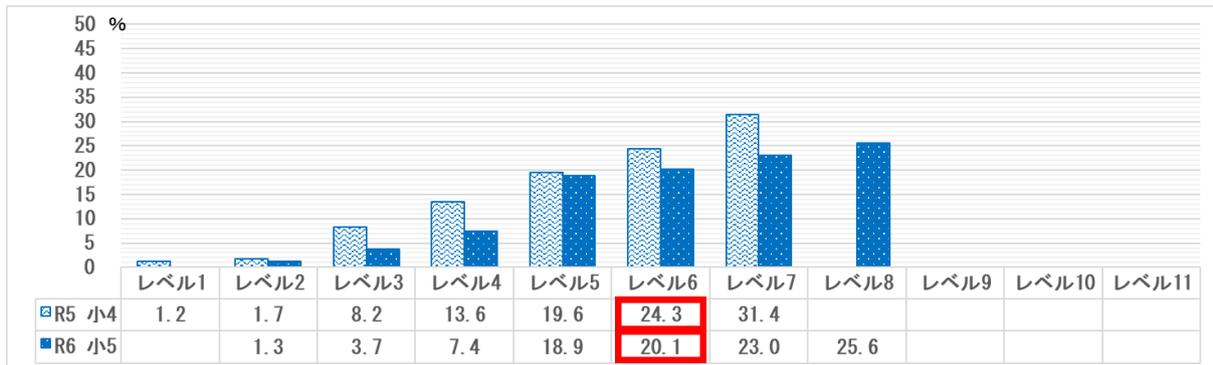
【年度の異なる同じ学年の比較（国語）】



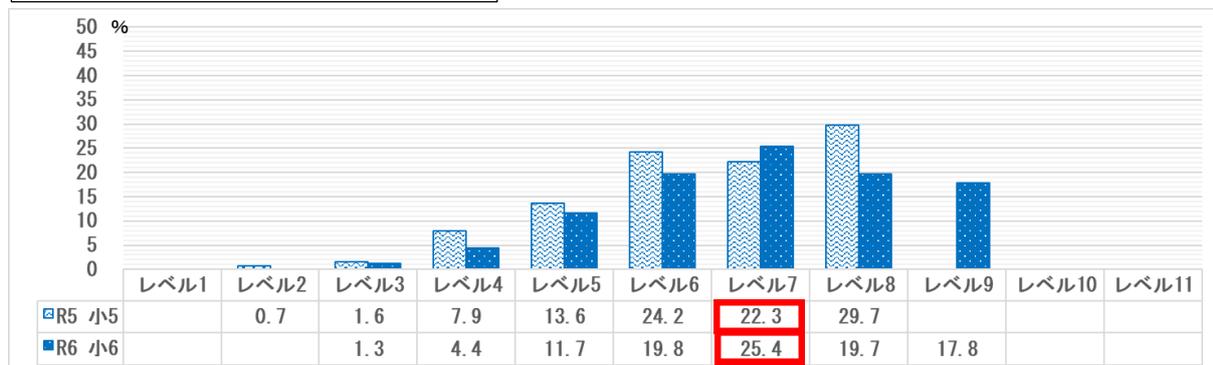
※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は、四捨五入しているので合計が100%にならない場合がある。

【同じ学年集団の経年比較（国語）】

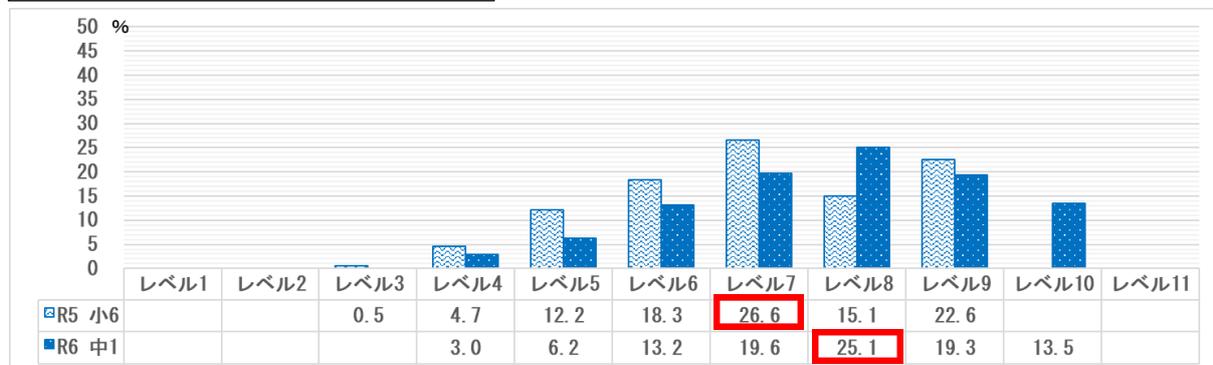
R5小学校4年生 → R6小学校5年生



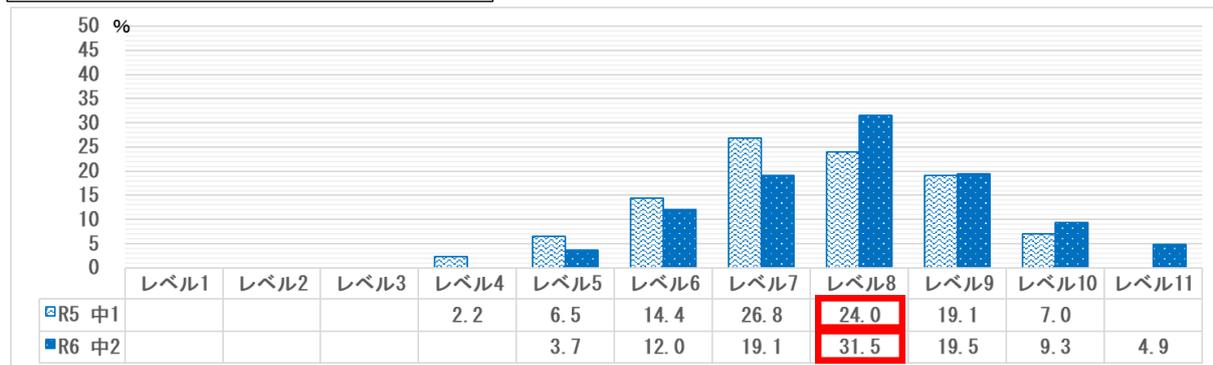
R5小学校5年生 → R6小学校6年生



R5小学校6年生 → R6中学校1年生

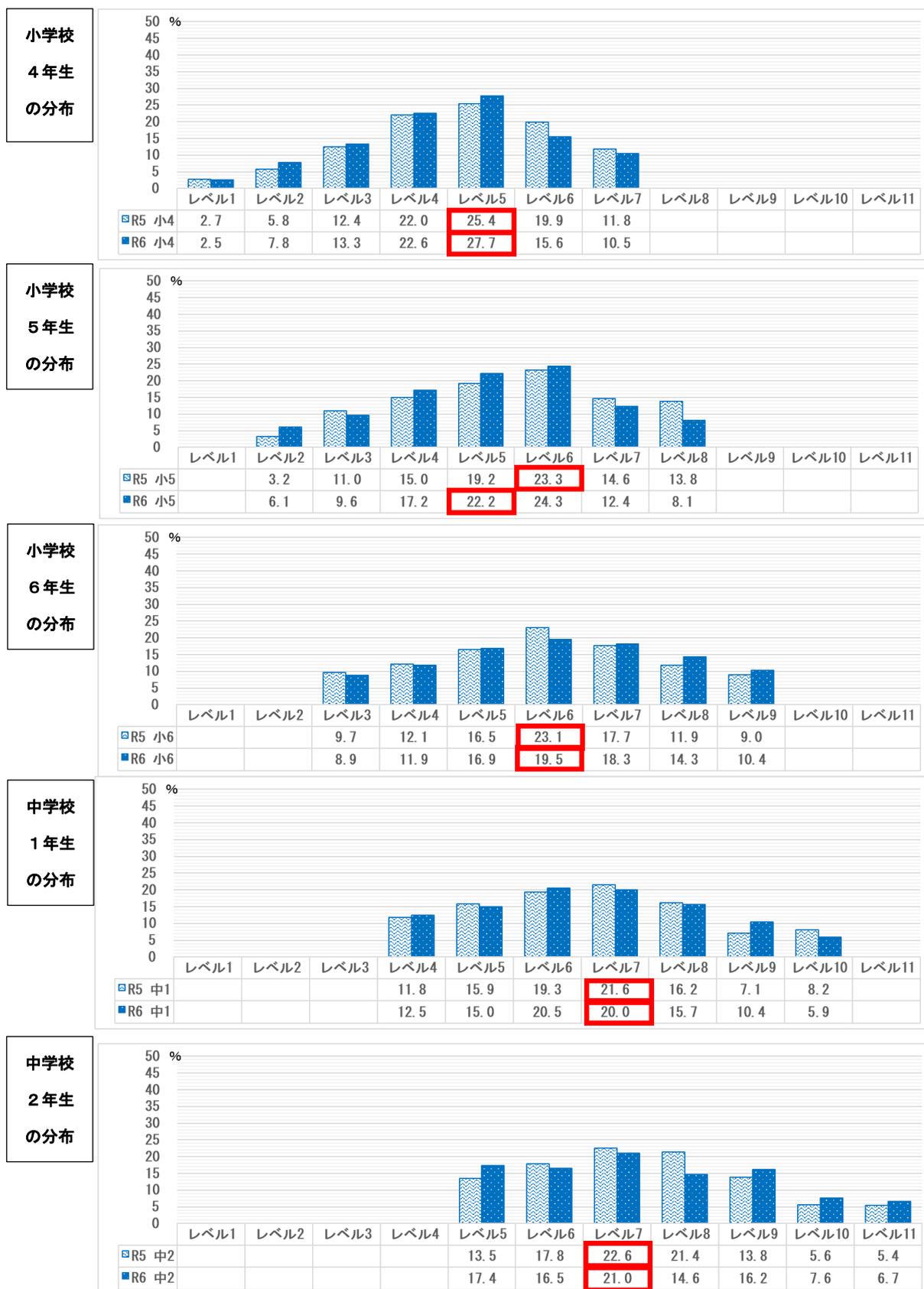


R5中学校1年生 → R6中学校2年生



(4) 県全体の「学力のレベル」の分布 ② 算数・数学

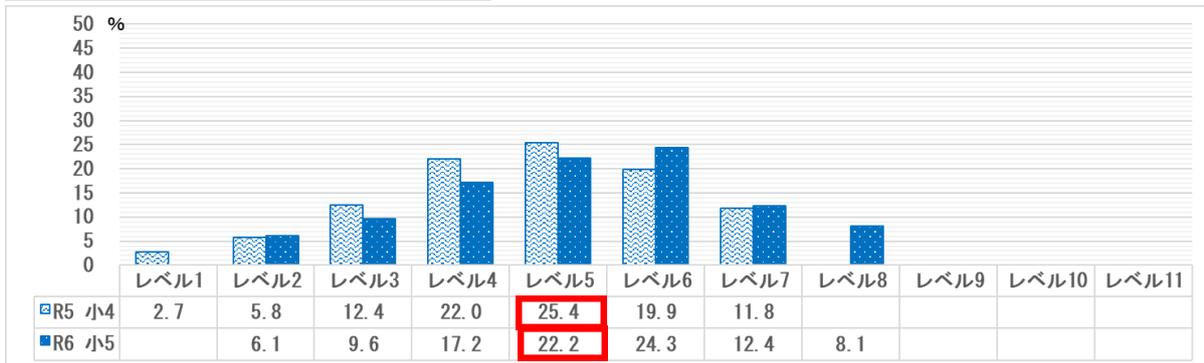
【年度の異なる同じ学年の比較（算数・数学）】



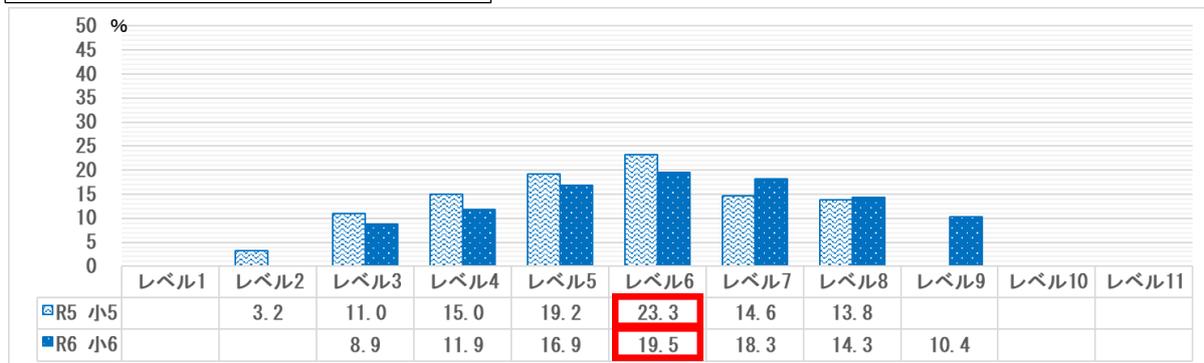
※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

【同じ学年集団の経年比較（算数・数学）】

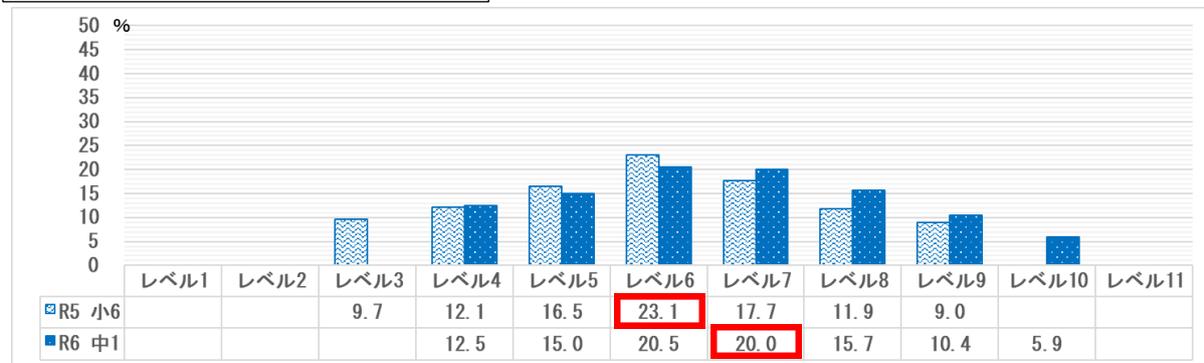
R5小学校4年生 → R6小学校5年生



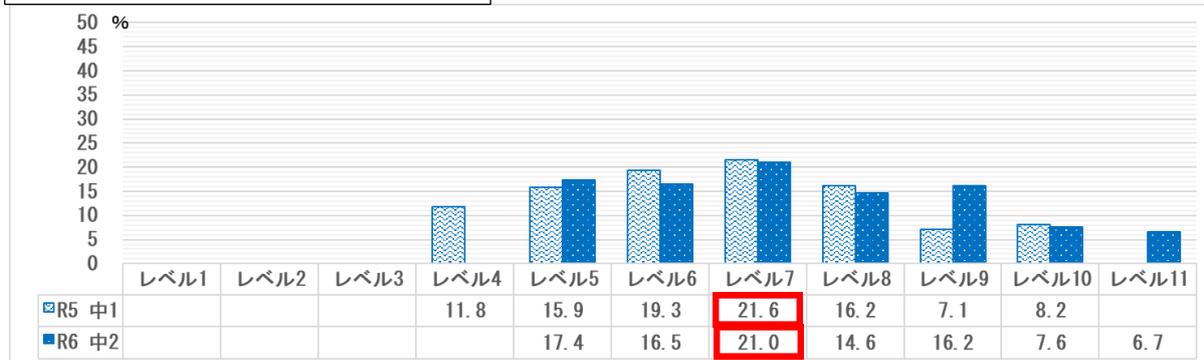
R5小学校5年生 → R6小学校6年生



R5小学校6年生 → R6中学校1年生



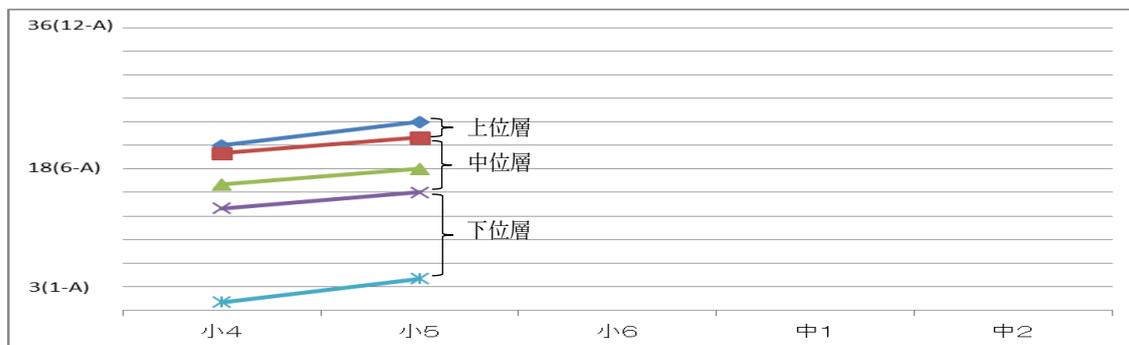
R5中学校1年生 → R6中学校2年生



(5) 県全体の「学力の伸び」の状況 ① 国語

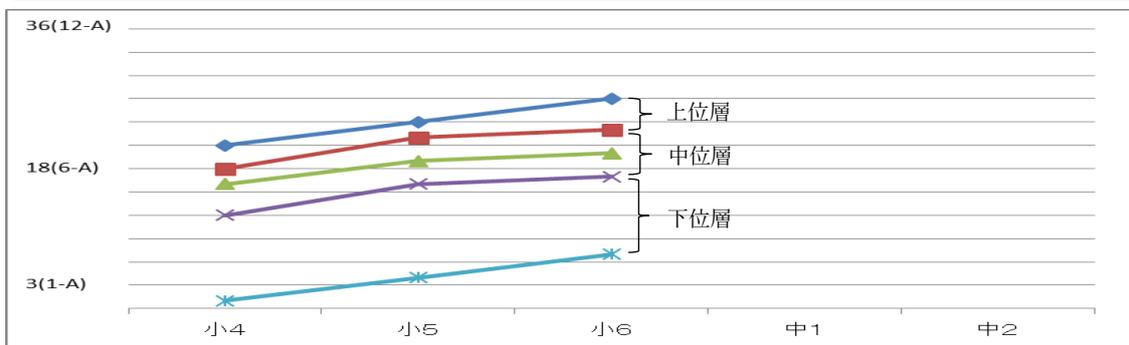
【現小学校5年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	—	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	20	22	—	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	16	18	—	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	13	15	—	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	—	—	—



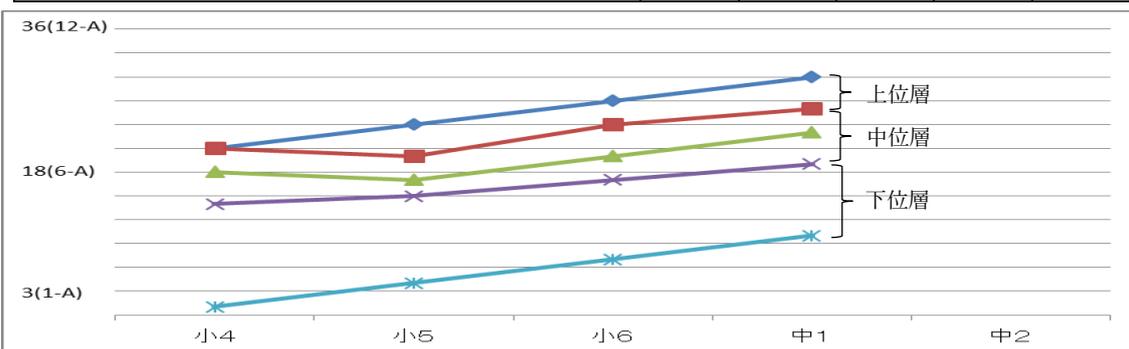
【現小学校6年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	18	22	23	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	16	19	20	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	12	16	17	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	—	—



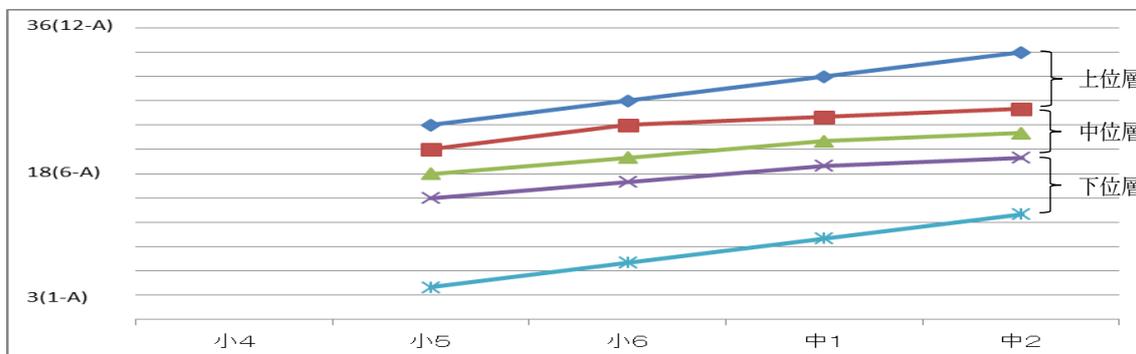
【現中学校1年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	24	27	30	—
上位から25%に位置する生徒が属するレベル	21	20	24	26	—
中央に位置する生徒が属するレベル	18	17	20	23	—
上位から75%に位置する生徒が属するレベル	14	15	17	19	—
最下位の生徒が属するレベル	1	4	7	10	—



【現中学校 2 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	—	24	27	30	33
上位から 25%に位置する生徒が属するレベル	—	21	24	25	26
中央に位置する生徒が属するレベル	—	18	20	22	23
上位から 75%に位置する生徒が属するレベル	—	15	17	19	20
最下位の生徒が属するレベル	—	4	7	10	13



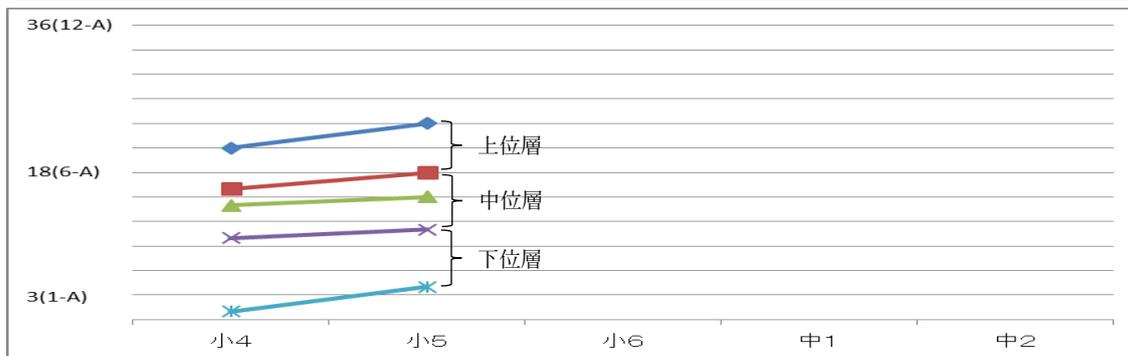
【国語】

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、令和5年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。

(5) 県全体の「学力の伸び」の状況 ② 算数・数学

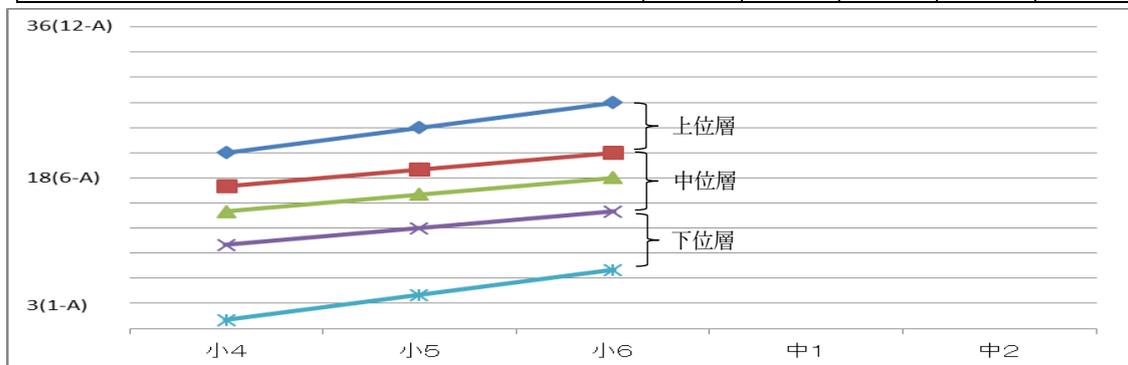
【現小学校5年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	—	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	16	18	—	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	14	15	—	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	10	11	—	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	—	—	—



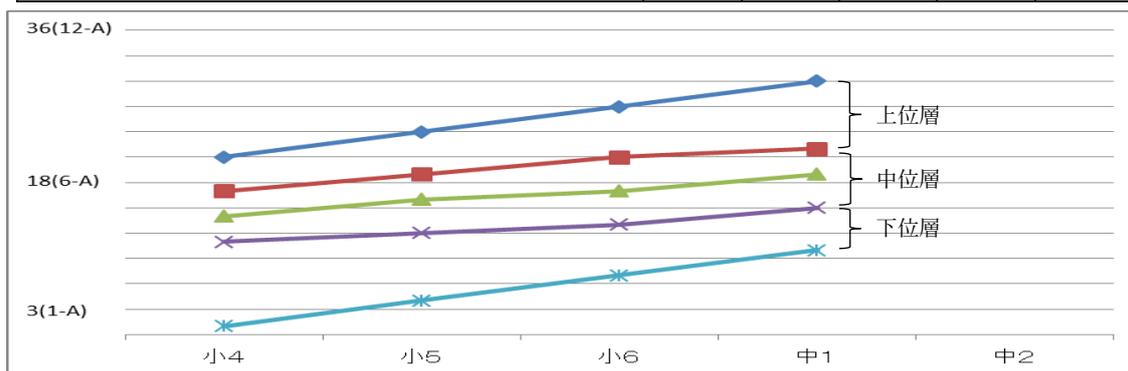
【現小学校6年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	17	19	21	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	14	16	18	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	10	12	14	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	—	—



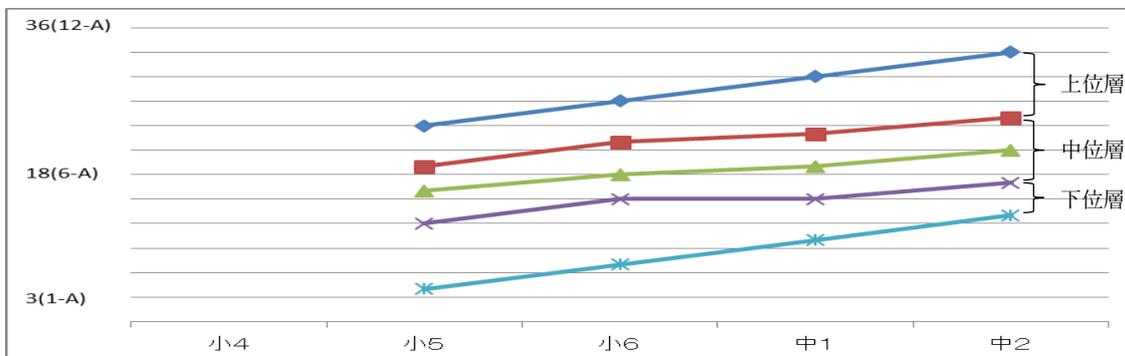
【現中学校1年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	24	27	30	—
上位から25%に位置する生徒が属するレベル	17	19	21	22	—
中央に位置する生徒が属するレベル	14	16	17	19	—
上位から75%に位置する生徒が属するレベル	11	12	13	15	—
最下位の生徒が属するレベル	1	4	7	10	—



【現中学校 2 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	—	24	27	30	33
上位から 25%に位置する生徒が属するレベル	—	19	22	23	25
中央に位置する生徒が属するレベル	—	16	18	19	21
上位から 75%に位置する生徒が属するレベル	—	12	15	15	17
最下位の生徒が属するレベル	—	4	7	10	13



【算数・数学】

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、令和5年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。

4 児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」

(1) 授業に関すること

- 学習の見通しを持つことや、話し合い活動で自分の考えを持つこと、学習内容のつながりを明確にすることと「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、学力向上に寄与している。

- ◎ 授業の始めに追究・解決への見通しを持たせることが、「主体的な学び」への原動力となるとともに、学習内容の定着につながる。
- ◎ 話し合い活動を取り入れる際には、目的や論点を明確にし、他の児童生徒と考えを共有したり比較・検討したりするように働きかけることが大切である。また、自分の考えをもう一度整理し、表現する時間を確保することも大切である。
- ◎ 「まとめ・振り返り」において、学びを深め、次の「学びへ向かう力」を育成するために、「何を学習したか」「どのように学習してきたか」とともに既習事項との関連を図ることも大切である。

【ふくしまの「授業スタンダード」より】

- ・ 「何を学習するか」「何ができればよいか」を明確にするために、「問い」や「思い・願い」を基に子どもたちの発言等をつないで焦点化し、学習課題を設定しましょう。
- ・ 思いや考えを広げ深めることができるようにするために、児童生徒の考えを基に話し合いをコーディネートし、ねらいに迫りましょう。
- ・ 学習した知識・技能を活用する活動を設定するなど「何を学習したか」をまとめたり、板書やノートなどを基に「どのように学習してきたか」を振り返ったりしましょう。

(2) 学習意欲や学習環境に関すること

- 学習の準備を整える等の授業に臨む心構えや、他の児童生徒及び教師から認められる等の自己肯定感と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 教師の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表する等の学習習慣や学ぼうとする意欲（非認知能力の一つ）と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

- ◎ 授業に臨む心構えを大切にさせ、始業前に学習用具を準備させる等のよりよい学習習慣や学習に対する前向きな姿勢を育てることが重要である。
- ◎ 学級経営において、教師が積極的に児童生徒のよいところをほめたり、児童生徒同士が互いのよさを認め、高め合う雰囲気を醸成したりすることにより、達成感を得たり、自己肯定感を高めたりすることが学力向上につながると考えられる。
- ◎ 児童生徒が友達の発表を聞き、自分の考えを相手に伝えるためには、教師は「何について話し合っているか」や「何を学んだか」が児童生徒にとって明確になるように発問を工夫する必要があると考えられる。

【ふくしまの「授業スタンダード」より】

- ・ 学習規律について、発達段階を踏まえて共通実践することを大切にしましょう。
- ・ 普段の学校生活全般において、教師と子ども、子ども同士の「望ましい人間関係」を築いていくことを大切にしましょう。
- ・ 発達段階に応じて、児童生徒にどのような活動を通してどこまで考えさせるかを明確にした授業づくりを大切にしましょう。

(3) 家庭での生活に関すること

- 特に中学校において、土曜日や日曜日など学校が休みの日に、勉強する時間（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む。）の長さとして「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 読書の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。また、家庭にある本の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

- ◎ 土曜日や日曜日など休日における家庭学習の時間の確保に加えて、その内容や方法を工夫し、その取組を振り返り見直す機会を設ける等、学校と家庭・地域の連携を図りながら児童生徒の自己マネジメント力を育てていくことが大切である。
- ◎ 家族と一緒に読書に親しむ機会を増やすことや、読書環境を整えることなど、引き続き読書量を増やす取組をすることは、学力の向上に寄与するものである。加えて、どのような本を読むかという点に着目し、地域の図書館なども活用し、幅広い読書活動を促すことも大切である。

【ふくしまの「家庭学習スタンダード」より】

- ・ 学習内容に応じて宿題（復習、予習）を効果的に活用した授業に努めたり、授業で学習したことを活用できる場面や方法を紹介したりするなど、授業と家庭学習をつなげましょう。
- ・ 「心の支え」、「環境づくり」、「習慣づくり」の3つの視点で家庭・地域と協力・連携体制を築いて、「自己マネジメント力」を育てていきましょう。
(家庭への働きかけとして)
- ・ 「環境づくり」の視点から、集中して学習できる環境を作ったり、家族と一緒に読書する機会を設けたりしていきましょう。
- ・ 「習慣づくり」の視点から、テレビやゲーム、スマホなどをするときのルールを決めましょう。また、「起床時刻」や「就寝時刻」、「学習を始める時刻」等の約束ごと、保護者と児童生徒が話し合い、家族みんなで規則正しい生活を心がけましょう。

5 学校質問調査結果から見える学校の取組状況

ふくしま学力調査では、児童生徒質問調査に加え、学校質問調査も行っています。ここでは、令和4年度調査から令和6年度調査までの3年分の回答状況を基に、児童生徒の学力向上、教員の授業改善に向けた学校の取組状況について整理しています。県全体の結果と自校の状況を比較し、今後力を入れたい取組や改善を図りたい取組などを考える参考にしてください。

なお、学校質問調査は、昨年度の状況について回答していますので、グラフは令和3年度から令和5年度までの取組の経年推移となっています。

(1) 学校・教職員の学力向上に向けた取組状況

- 小中学校とも、3年間で肯定的回答が増加している。
- 各学校において、校長のリーダーシップの下、組織的対応がなされている。
- 小中学校で肯定的回答に大きな差がある質問項目があり、小中で取組が繋がっていない校区がある可能性がある。

◎現状をしっかりと分析し、校長のリーダーシップの下、組織的に対応することが重要である。

◎教員同士の相互研究等を活性化することが授業改善につながると考えられる。

◎児童生徒の自己肯定感を高める取組が主体的な学びにつながると考えられる。

◎小中において取組に差がないか確認し、必要に応じて中学校区で共通実践していくことが重要である。

(2) 令和6年度の小学校6年生、中学校3年生に対する取組状況

県では、8月に令和6年度全国学力・学習状況調査の結果を「授業改善グランドデザイン」として公表しました。今回の調査対象であった小学校6年生と中学校3年生に対するこれまで県全体の学校の取組状況について、ふくしま学力調査の学校質問調査回答結果から見ていきます。小中の取組状況の違いにも着目してください。



※授業改善グランドデザインも併せてご覧ください

URL:<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/646122.pdf>



- 家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。
- 家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。
- 学習意欲や学習規律に対する意識が年々高まっていくような取組が求められる。
- 家庭学習の与え方等について、小中で差が見られる。

◎児童生徒が熱意をもって主体的に学習できるように、学級担任や教科担任が替わっても継続した取組を行っていくことが重要である。

◎家庭学習について、自分で調べたり、考えをまとめたりする課題を与えるなど、質的改善が必要である。家庭学習で取り組ませたことを授業と関連付けるなどの取組も考えられる。

【現小学校6年生、中学3年生に対する国語の状況について】

- 補足的・発展的な学習を行う時間が年々増加していた。
- 発問や対話を重視した授業が年々増加していた。
- 発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導を充実させていくことが求められる。

- ◎すべての学年において、ふくしま学力調査を基に一人一人の児童生徒の実態を分析し、補足的・発展的な学習を計画的に取り入れる必要がある。
- ◎すべての学年において、教師からの一方通行で画一的な授業ではなく、児童生徒の多様な考えをいかすことができる発問と対話によって、考えを深める授業への転換が必要である。
- ◎根拠や理由を基に、自分の考えを書かせたり、話したりする授業が日常的に行われるようにすることが必要である。

【現小学校6年生、中学3年生に対する算数・数学の状況について】

- 継続して、児童生徒に自ら解決の方法を考えさせる発問がなされていた。
- 現小学校6年生に対しては、授業のまとめの場面で、学習した内容をどのように活用できるかを児童に文章で書かせたり、図やグラフで書かせたりする授業の割合が年々増加していた。
- 現中学校3年生に対しては、中学1年生時よりも中学2年生時の取組の方が肯定的回答が減少している項目が複数見られた。

- ◎すべての学年において、ふくしま学力調査を基に一人一人の児童生徒の実態を分析し、補足的・発展的な学習を計画的に取り入れる必要がある。
- ◎すべての学年において、児童生徒自ら解決の方法を考えられる発問と対話によって、課題解決に導く授業が積極的に行われる必要がある。
- ◎特に中学校においては、一方的に教授する場面が多すぎないか確認し、教えるべきこと、考えさせるべきことのバランスを考えた授業改善が必要である。

(3) 調査結果の活用状況

- ほぼすべての学校が、個人結果票を返却する機会を捉え、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。
- ほぼすべての学校が、返却された結果帳票を用いてデータを分析し、指導にいかしている。
- 学力や非認知能力等を大きく伸ばした教員へ聞き取りを行った学校が年々増加している。
- 調査結果から把握した内容について全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が年々増加している。

- ◎ふくしま学力調査の目的や仕組みの理解が広がっており、有効に役立てられていると考えられる。
- ◎児童生徒の学習意欲等につなげるため、個人結果票を返却する際は、すべての学校が児童生徒をほめ、助言する機会とする必要がある。
- ◎データを分析し、エビデンスに基づいて指導改善が進められていると考えられる。管理職、教務主任、学級担任、教科担任など、それぞれの立場に応じた分析がさらに進められることが期待される。
- ◎学力や非認知能力を大きく伸ばした教員の効果的と思われる取組を聞き取り、横展開することによって学校の強みを増やしていくことが期待される。

6 各学校における分析とその活用例について

1 子ども一人一人の「学力のレベルと学力の伸び」の可視化

各学校に配付されている「帳票40」には、以下のとおり前年度調査の学力のレベルとの比較により、「昨年度からの学力の伸び」が数値として示されている。

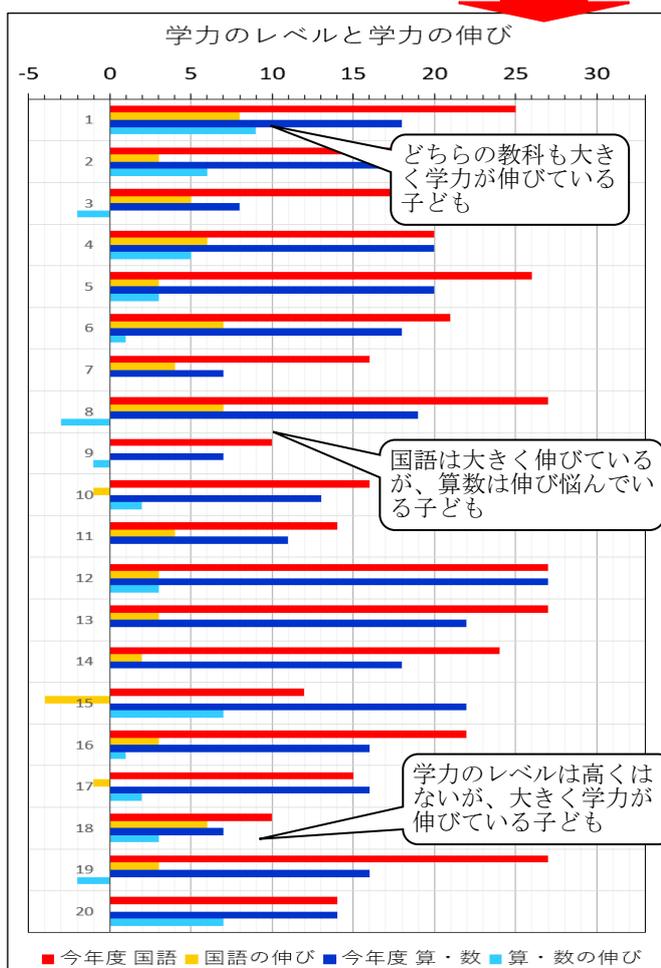
40 学校用		令和6年度ふしあ学力調査 (小学校6年生)		学力分析データ(学力のレベル・伸び・学習方略・非認知)児童生徒別		〇〇立△△小学校																																			
<small>本帳票の「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方略」「非認知能力」の数値の範囲は、1.0～5.0となっています。 数値が大きいほど、よい値となっています。 「昨年度からの学力の伸び」がマイナスの場合は、赤字で表記しています。</small>																																									
				<table border="1"> <tr> <th colspan="2">国語</th> <th colspan="2">算数・数学</th> </tr> <tr> <th>昨年度からの学力のレベル</th> <th>昨年度からの学力の伸び</th> <th>昨年度からの学力のレベル</th> <th>昨年度からの学力の伸び</th> </tr> <tr> <td>8-B</td> <td>0</td> <td>8-B</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>7-B</td> <td>0</td> <td>7-B</td> <td>1</td> </tr> </table>		国語		算数・数学		昨年度からの学力のレベル	昨年度からの学力の伸び	昨年度からの学力のレベル	昨年度からの学力の伸び	8-B	0	8-B	5	7-B	0	7-B	1	<table border="1"> <tr> <th colspan="2">学年平均</th> <th colspan="2">学校平均</th> <th colspan="2">市町村平均</th> </tr> <tr> <td>8-B</td> <td>0</td> <td>8-B</td> <td>5</td> <td>8-A</td> <td>6-A</td> </tr> <tr> <td>7-B</td> <td>0</td> <td>7-B</td> <td>1</td> <td>6-A</td> <td>6-B</td> </tr> </table>		学年平均		学校平均		市町村平均		8-B	0	8-B	5	8-A	6-A	7-B	0	7-B	1	6-A	6-B
国語		算数・数学																																							
昨年度からの学力のレベル	昨年度からの学力の伸び	昨年度からの学力のレベル	昨年度からの学力の伸び																																						
8-B	0	8-B	5																																						
7-B	0	7-B	1																																						
学年平均		学校平均		市町村平均																																					
8-B	0	8-B	5	8-A	6-A																																				
7-B	0	7-B	1	6-A	6-B																																				
年度	市町村教育委員会コード	市町村教育委員会名	学校コード	学校名	個人番号	学年	組	出席番号	性別	個人番号	学年	組	出席番号	性別	福島県平均																										
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****421	5	1	-	1	****421	6	1	-	1	9-C	8	6-B	6-A	9	3-A																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****422	5	1	-	1	****422	6	1	-	1	7-B	3	8-B	8-B	6	6-B																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****423	5	1	-	1	****423	6	1	-	1	8-B	5	6-A	3-B	-2	4-C																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****424	5	1	-	1	****424	6	1	-	1	7-B	6	5-B	7-B	5	5-A																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****425	5	1	-	1	****425	6	1	-	1	9-B	3	8-B	7-B	3	6-B																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****426	5	1	-	2	****426	6	1	-	2	7-A	7	5-B	6-A	1	6-B																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****427	5	1	-	1	****427	6	1	-	1	6-C	4	4-A	3-C	0	3-C																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****428	5	1	-	1	****428	6	1	-	1	9-A	7	7-B	7-C	-3	8-C																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****429	5	1	-	1	****429	6	1	-	1	4-C	0	4-C	3-C	-1	3-B																					
2024	01	〇〇〇教育委員会	070700000	〇〇〇立△△小学校	****430	5	1	-	2	****430	6	1	-	2	6-C	-1	6-B	5-C	2	4-B																					

本調査の特徴の一つである「学力の伸び」から、子どもたちのどのような姿が見えてくるのか、数値だけでは見えにくいのではと考え、「学力のレベルと学力の伸び」を可視化する「グラフ化ツール」を作成し、県内すべての小・中学校、義務教育学校、県立特別支援学校小学部・中学部及び、市町村教育委員会へ配布し、「グラフ化ツール」の使い方及び活用事例についてオンライン説明会を実施した。

右のグラフは、「グラフ化ツール」によって作成された小学校6学年のグラフの例であり、子ども一人一人の国語と算数の「学力のレベル」と「昨年度からの学力の伸び」を表している。

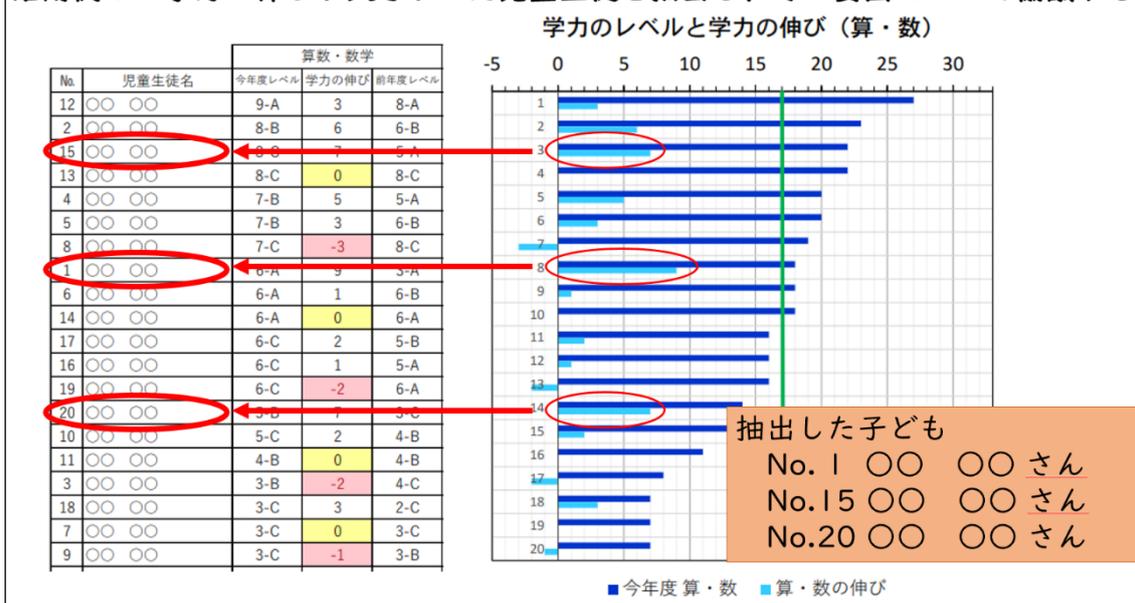
このグラフから、例えば、どちらの教科も大きく学力が伸びている子どもや、国語の学力は大きく伸びているが、算数は伸び悩んでいる子どもなど、子ども一人一人の「学力のレベル」と「昨年度からの学力の伸び」の状況が見えてくる。

グラフ化ツールでは、教科ごとの学力のレベルと学力の伸びを表示するグラフも作成することができる。



これらのグラフを基に、子ども一人一人に寄り添い、称賛したり、励ましたりすることはもちろんだが、これらの結果を授業改善に生かすことが大切である。単に結果を見て、学力の状況を把握するだけでなく、例えば、学力が大きく伸びている子どもを、校内研究授業における抽出対象とし、事後研究会で学習への取組状況等を共有したり、伸び悩んでいる子どもに対する個別支援の方法を検討したりすることが考えられる。他にも、子ども一人一人にどのような変容があったのかを、生徒指導の面から話し合うことも考えられる。

活用例Ⅰ：学力の伸びが大きかった児童生徒を抽出し、その要因について協議する



活用例Ⅰ：学力の伸びが大きかった児童生徒を抽出し、その要因について協議する

＜グループ協議＞
 抽出した児童生徒の学力が伸びた諸要因について、
 実践感覚から推測してみましょう。

- Aグループ No.1 〇〇 〇〇 さん
- Bグループ No.15 〇〇 〇〇 さん
- Cグループ No.20 〇〇 〇〇 さん

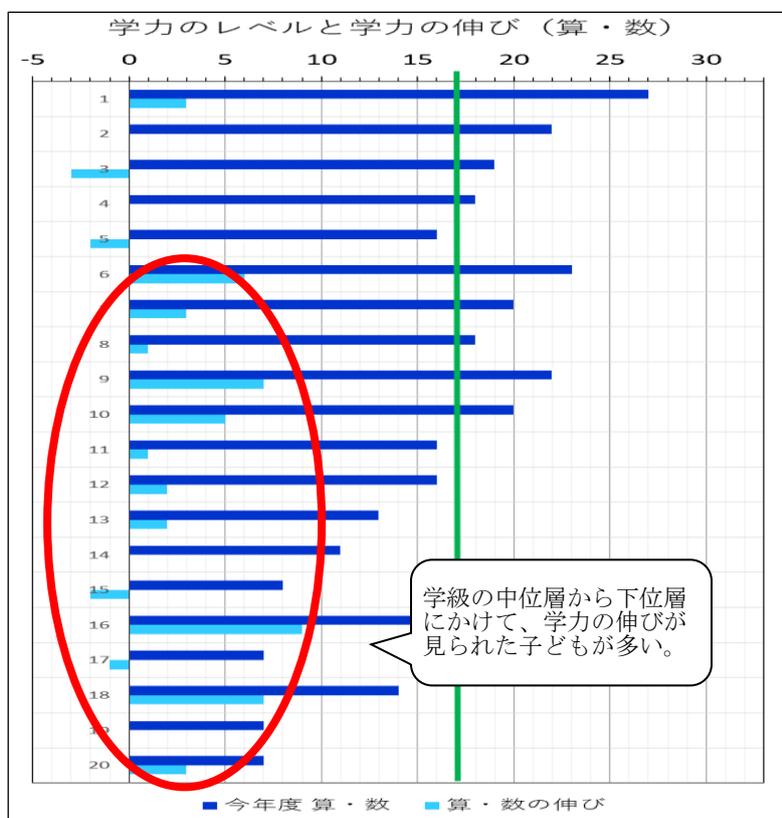
※グループで複数人を抽出して協議するパターンもあり



2 学級全体の学力の伸びの傾向を捉える

グラフ化ツールでは、教科ごとの学力のレベルと学力の伸びのグラフを、昨年度の学級で昨年度の学力のレベル順に並べ替えることもできる。このように並べ替えることで、昨年度の学級の学力の伸びの傾向を捉え、それを基に、指導の特長（よさ）について協議するという活用法も考えられる。

例えば、下のグラフでは、中位層から下位層にかけて、学力の伸びが見られた子どもが多いことが分かる。この学級を指導していた先生の取組を互見授業等により共有することで、学校全体の授業改善につなげていきたい。どのような指導が学力の伸びによい影響を与えているかを協議してその特徴（よさ）を明らかにし、それぞれの学級の実態に応じて、工夫しながらそれぞれの授業に取り入れていくことで、具体的な指導方法等の改善につなげられると考える。



活用例2：学級の学力の伸びの傾向から、指導の特長（よさ）について協議する

①学級の学力の伸びの傾向を捉える。

②学力を伸ばしている先生の授業を参観するなどして、指導の特長（よさ）について、全体で話し合う。

③明らかになった「よさ」を、学級の実態に応じて工夫しながらそれぞれの学級で取り入れる。

△△先生の学級は、下位層の子どもの多くが学力が大きく伸ばしていますね。

私は授業を構想する際には、～～ということを特に意識しています。また、授業中に発問するときには…

私の学級の実態を考えると、～～としてみるといいかも…

さらに、自校において、教科のどの領域、どの観点において強みや課題が見られるかについては、「帳票09」や「帳票28」から、学年全体や学級ごとの状況を把握することができる。さらには、必要に応じて「帳票01」から、子ども一人一人の採点結果を確認し、個別最適な学びにつなげることも大切である。

特別寄稿 分析協力者・宮城教育大学教職大学院 田端健人教授より

令和4年3月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めている。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものである。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていく。

【分析協力者プロフィール】

宮城教育大学 教職大学院 教授 田端 健人 氏

<研究>※科学研究助成事業（科研費）・基盤研究B

○研究題目「グローバル世界を視野とする学力・非認知能力の効果的学校モデル」

(2020-22年)

「学力/非認知能力を効果的に育成するスクールリーダーのデータサイエンス」

(2023-25年)

※ 本研究を進めるチームは、田端教授他7名

○研究の概要

- ・ 児童生徒の学力と非認知能力を向上させる「効果的学校」の姿を明らかにすること。
- ・ 校長のどのようなリーダーシップが、教職員のどのようなコラボレーションが、教師のどのような学級づくりや授業や支援が、児童生徒の学力と非認知能力を効果的に向上させるかを明らかにすること。

※ 全国学力・学習状況調査等を用いて、上記の研究を行っている。

<経歴等>

2019年4月～ 宮城教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻
(教職大学院) 教授 (現職)

2021年4月～ 文部科学省 学力調査アドバイザー (現職)

<主な著書>

○『IRT分析ソフト EasyEstimationによる全国学力・学習状況調査の検証と経年比較』

(パイディア出版 2022年6月13日発行)

○『子どもの言葉データサイエンス入門—jReadabilityの活用と検証—』

(パイディア出版 2021年)

学力も非認知能力も

宮城教育大学教職大学院 教授 田端健人

1. 学力と非認知能力の相関の有無

この分析報告書にもあるように、ふくしま学力調査では、非認知能力に関して、5種類を質問しています。「自制心」「自己効力感」「勤勉性」「やりぬく力」「向社会性」です。自己効力感はずべての学年に質問していますが、他は学年指定で、令和6年度ですと、「自制心」は小学5年生、「勤勉性」は中学2年生、「やりぬく力」は小学6年生、「向社会性」は小学4年生と中学1年生に質問しています。

気になるのは、これら非認知能力が、国語や算数・数学の学力値と相関関係にあるか否かです。つまり、非認知能力が高いと、教科の学力値も高いのでしょうか。そこで、令和5年度のふくしま学力調査結果から、相関係数(r 値)を計算してみました。すると、「自己効力感」だけ、学力と相関があり、他の非認知能力は相関なしでした。この調査方法では、自己効力感以外の非認知能力は、学力値に対して、独立性が高いことになります。

自己効力感と学力との相関係数を一覧にすると、以下の表になります。

表：自己効力感と学力との相関係数一覧（令和5年度データから）

	小4	小5	小6	中1	中2
国語	0.21	0.20	0.24	0.21	0.33
算数・数学	0.24	0.29	0.37	0.34	0.45

相関係数の一般的な目安として、 $r=0.20$ が相関ありの下限で、 0.40 は中程度、 0.70 以上は強い相関とされます。児童生徒の家庭環境、専門用語でいう「社会的経済的文化的背景 (Socio-Economic Cultural Status: 「SES」と略)」が学力値と相関することはよく知られています。同データで計算してみると、その相関は 0.19 から 0.28 、つまり「弱いけれども確かに相関がある」といえる値でした。SES との相関係数と比べることで、自己効力感と学力との相関の強さも評価できます。つまり、自己効力感とは、SES よりも学力値と一そう強く相関するのです。

上記の表からは、学力と自己効力感との相関は、国語よりも算数・数学の方が高く、学年が上がるにつれ、算数・数学との相関係数が大きくなっていることもわかります。

2. 「勉学での自己効力感」

ちなみに、自己効力感の質問は、以下の8項目です。複数の質問項目を合算して一つの変数にしているので、「合成変数」とも呼ばれます。

- ・ 授業ではよい評価をもらえるだろうと信じている
- ・ 教科書の中で一番難しい問題も理解できると思う
- ・ 授業で教えてもらった基本的なことは理解できたと思う
- ・ 先生が出した一番難しい問題も理解できると思う
- ・ 学校の宿題や試験でよい成績をとることができると思う
- ・ 学校でよい成績をとることができるだろうと思う
- ・ 授業で教えてもらったことは使いこなせると思う
- ・ 授業の難しさ、先生のこと、自分の実力のことなどを考えれば、自分はこの授業でよくやっている方だと思う

これら8項目の質問をよく読むと、どの項目も「授業」「教科書」「試験」「成績」など勉学に関する質問になっていることがわかります。ふくしま学力調査の「自己効力感」は、勉学に焦点化した自己効力感です。ですので、「勉学での自己効力感」と受けとめるのがよいでしょう。

上述のように、勉学での自己効力感とは、国語よりも算数・数学の学力値と一そう強い相関があることから、算数・数学でよい成績や評価を得られたり、算数・数学に自信をもてたりすることが、勉学全般の自己効力感につながっている可能性があります。

対照的に、非認知能力の他の4つの合成変数は、必ずしも勉学に焦点化していません。例えば、「やりぬく力」の一つは、「大きな課題をやりとげるために、失敗をのりこえてきました」という文言になっています。「大きな課題」や「失敗」という言葉から、回答する児童生徒たちは、勉学以外の課題や失敗を思い浮かべることができます。「勉強での大きな課題」と質問すれば、学力値との相関係数も異なる結果になったことでしょう。「勉学での自己効力感」スコアは学力値と一定の相関があり、その他の一般的な非認知能力スコアは、学力値とは独立的である、とご理解ください。

たとえ学力と相関関係がなくても、それぞれの非認知能力が一定程度高いことは望ましいことです。非認知能力は、伝統的な言い方をすれば、知徳体の「徳」の力になります。学校と家庭と社会で育むべき大切な力です。

3. 「主体的・対話的で深い学び」と「学級風土」の重要性

ふくしま学力調査結果からは、「主体的・対話的で深い学び」と「学級風土」の合成変数をつくることもできます。分析したところ、これら2つの合成変数は、5つの非認知能力と相関することがわかりました。令和5年度中学2年生の分析結果を紹介すると、「数学での主体的・対話的で深い学び」は、「勉学での自己効力感」「規範意識」「学級風土」と中程度の相関（いずれも $r=0.52$ ）があり、「自制心」と弱い相関（ $r=0.29$ ）がありました。数学の授業で主体的・対話的で深い学びをしている生徒ほど、「勉学での自己効力感」や「規範意識」が高い傾向にあり、「学級風土」もよいと感じる傾向にあります。

また「学級風土」は、「規範意識」と中程度（ $r=0.43$ ）、「勉学での自己効力感」や「自制心」と弱い相関がありました（順に 0.33 と 0.27 ）。

「主体的・対話的で深い学びに積極的に取り組み、お互いを認め合う学級風土をつくりあげることによって、児童生徒の非認知能力が高まる」という仮説を支持するエビデンス（証拠）です。どうすれば非認知能力を伸ばすことができるか、を考え実践するためのヒントにもなります。学力も非認知能力も、学校と家庭、さらには地域社会のなかで育まれます。学校はもちろん、家庭や地域でも、子どもの「主体性」「対話」「学び」「とりまく風土」の重要性を認識し、なおいっそう尊重してまいりましょう。